

とより歌舞音曲を通じ、なお各地の方言にも通じているという、梁山泊の好漢たちの中でも異色の人物である。

ところで元曲の中にこの浪子燕青を主人公とした戯曲がある。李文蔚作『同楽院燕青博魚』（省略『燕青博魚』）がその一つである。

『水滸伝』には、よく戯曲を題材とした挿話があるが、この『燕青博魚』は小説には見られないものである。しかし、この戯曲の影響を小説が受けていることは疑いない。

小説の『水滸伝』と元曲『燕青博魚』との燕青像を比較的検討することにより、元曲から小説へ到る過程でどのような変化が起こったのか、考察してみたい。

近世日本における『老子』関連文献について

博士後期課程 二年 清水 信子

近世、我が国の漢学者による『老子』関連文献は、その実在が明らかになただけでも約八十余点にのぼる。それらの内容・形式は、初め河上公・林希逸・王弼等の注釈書をテキストとし、それらを注釈するという『老子』を二次的に解釈したものであったが、次第に『老子』経文を既存の注釈を引用しつつも各自解釈したもの、さらにはそれらを既存の注釈によらず独自の見解を展開したもの等多岐に亘るようになった。当時の漢学界においては、程朱学・古義学・復古学・古注学・考證学・折衷学等の学派があり、それぞれの学風を展開していたとされる。そして『老子』関連文献の撰者も多くは、これらの学派のいずれかに所属しもしくは位置付けられていた。

今回の発表では、近世日本における『老子』関連文献について、各撰者の位置する学派の別による『老子』に対する見解・解釈の特徴及び相違、また成立した時代による変遷等を考察していきたい。